

阿蘇山の

神と仏

火山信仰文化ガイド



阿蘇火山信仰

たびたび噴火する阿蘇中岳火口は、

古くから「自然神」としてあがめられてきました。

阿蘇山上はかつて山岳仏教の一大霊場でした。

三十七坊と五十以上の庵が立ち並び、

今では想像できない別世界が広がっていました。

阿蘇は健磐龍命けんぱりゅうのみことという神様が開拓したとされています。

阿蘇は神様と仏様が共存し、

一三〇〇年にわたって祈りが続けられてきた場所なのです。

このガイドブックでは、阿蘇の神様と仏様について解説し、

火山信仰文化にまつわる歴史をひもときます。

山岳仏教の聖地へ思いをはせてみれば、

阿蘇の違う表情が見えてきます。

目次

神話の時代

火口は「神様」だった ————— 04

神様の名は「健磐龍命」 ————— 06

健磐龍命にまつわる地名 ————— 08

奉幣、読経で「噴火鎮め」 ————— 10

山林修行の聖地だった ————— 12

古坊中の時代

最栄読師が「阿蘇山」を開く ————— 14

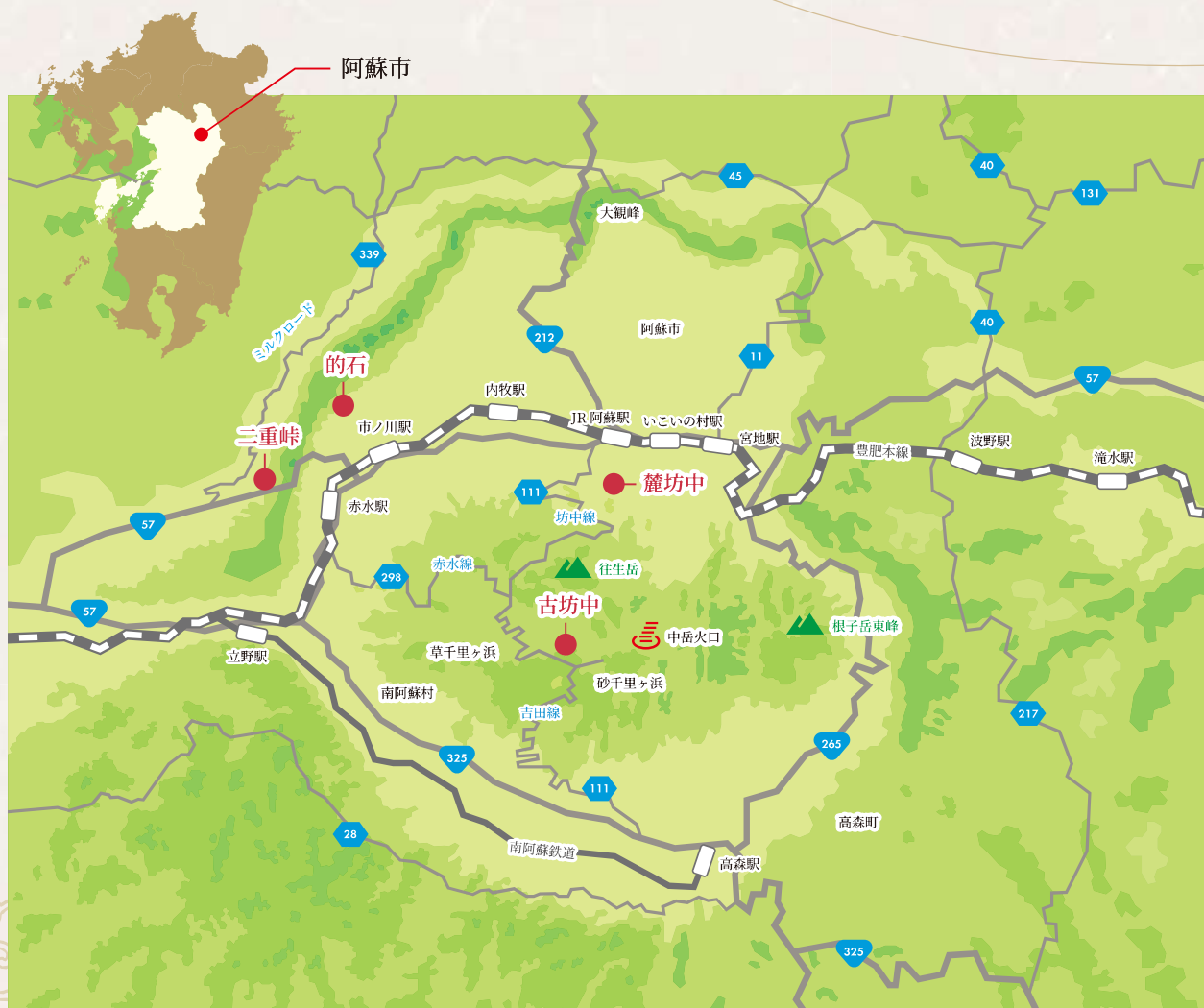
火口と神の「聖なるライン」 ————— 16

噴火は大事件の前兆!? ————— 18

火口近く 三十七坊が並ぶ ————— 20

僧侶たちの組織があった ————— 22

争乱に巻き込まれ僧侶は四散 ————— 24



麓坊中の時代

加藤清正が坊を再興

26

隆盛を誇った麓坊中

28

坊中散策マップ

30

山に入って「峰入り」修行

32

山から山へ：厳しい峰入り

34

阿蘇の守り神「乙護法」

36

今に伝わる「乙護法」の数々

38

彼岸には「オンダケサンマイリ」

40

明治維新で三十七坊は廃寺に

42

年表

44

「古坊中」調査を振り返る

46

参考文献

47



火口は「神様」だった

中国の隋時代の歴史書に 「火を起こす阿蘇山」

阿蘇中岳火口は、古代から「神様」としてあがめられてきました。

「阿蘇」の歴史をさかのぼってみると、中国の隋時代の歴史書、『隋書』ずいしょ倭国伝に「阿蘇山」という言葉が登場します。

『隋書』倭国伝は七世紀前後の日本を知る貴重な史料です。隋の時代は聖徳太子の「日出ずる処の天子」で始まる国書により日本と隋の交流が密接となり、使者の見聞が、同書に反映していると言われています。

この書にはこう書かれています。

阿蘇山という山があり、その山の石が理由もなく、火を起こし天に接すると、民は異常とみなして祈りの祭りを行っている。青く、鶏卵の大ききさくらいの如意宝珠がある。夜は光り、魚の目玉のようだ。

阿蘇にあるという「如意宝珠」は、仏の教えを象徴する珠として尊ばれています。「西遊記」で孫悟空が持つ「如意棒」と同じ種類です。

この歴史書に出てくる山は阿蘇山だけです。火山がない中国からの使節にとって、火



を噴く山の話は印象深いものだったので
しょう。また、人びとが阿蘇山に対して信仰
を寄せていることが推測されます。

奈良時代の風土記に 「五色の波の霊沼」

日本の古文書では阿蘇はどう書かれてい
るのでしょうか。

奈良時代、国ごとに風土記が編纂されまし
たが、現存するものはわずかで、多くは風土記
逸文から引用する形で断片的に残されてい
ます。

鎌倉時代に著された『新日本紀』には、「筑
紫風土記」を引用する形で阿蘇山に関するこ
んな記述があります。

「肥後国関宗県」には関宗岳あそという禿山はげやまが
あり、頂に「霊沼」れいしやうがあり、時々水が満ちて南
より流れて白川に入ると、多くの魚が酔って
死ぬ。土地の民は「苦水」と呼ぶ。沼の大きさは
縦五〇丈（一丈は約三メートル）、横一〇〇
丈、深さは一五丈から二〇丈ある。その潭は
清く百尋に及び、波は五色に彩られ、黄金の
大綱が間を分けるかのように、多くの川の
水源として水分みづまりをなす。

関宗岳は「地心」にあるので「中岳」といい、
「関宗神宮」であると結んでいます。「霊沼」は幻
想的に描かれています。関宗県の民は関宗岳を
土地の神がいる神宮としてあがめていたとい
えます。

上空から見た阿蘇中岳火口。古くから火口は「神様」としてあがめられてきました。
(写真提供・ジェットヘリサービス)



神様の名は「健磐龍命」

健磐龍命の伝説数々 立野を蹴破って平地に

奈良時代に「靈沼」と呼ばれていた火口は、平安時代になると「神靈池」という呼び方に变化します。『続日本後紀』には「健磐龍命神靈池」とあり、健磐龍命という神様の神宮とみなされていることがうかがわれます。

神話では、健磐龍命は初代天皇、神武天皇の孫とされます。九州を治めるために都からやってきて、阿蘇都比咩（阿蘇都姫）と結婚して阿蘇大明神となります。

こんな伝説が伝わっています。

かつて阿蘇谷は水をたたえた湖だった。健磐龍命が湖を干して平野にしようと、外輪山を蹴ったが、山が二重の峠になっていったため、最初は破ることができなかった。次に立野を蹴ると水が勢いよく流れて平野をつくることに成功した！。

このとき健磐龍命は勢いあまって尻もちをつき、「余はもう立てぬのう」と言ったため、「立野」という地名になったと伝わります。蹴破れなかったところは「二重峠」という地名が残っています。湖には主の大鯰がい

て、湖から流れ着いたところが、現在の嘉島町鯉とされています。

外輪山には、健磐龍命が往生岳の上からの的にして弓を射たという「的石」があります。この奇石がある場所は、的石という地名になっています。

火山の活動は

「神様の意思」と畏怖

平安時代の『日本後紀』延暦一五（七九六）年の条には、こんなことが書かれています。

阿蘇山上の神靈池と呼ばれている沼の水は増減することがなかった。ところが、なぜ

か二十丈余り（約六十メートル）も涸れて減っている。占った結果、旱疫（干ばつ）と出た！。

『日本紀略』弘仁一四（八二三）年の条に健磐龍命は「早魃に祈れば雨をもたらす、護国救民の神である」と書かれています。

健磐龍命は神靈池に宿る神で、神靈池が枯渇することは、旱疫や兵疫（戦いが起きる）などの前兆と受け止められていました。火山の動きは「神の意思」とみなされ、人びとが畏怖の念を持っていたことが分かります。

健磐龍命と阿蘇都比咩は阿蘇山上にまつられる神でした。その後、阿蘇山の麓、宮地に阿蘇社（阿蘇神社）が設けられます。阿蘇社には一宮の健磐龍命、二宮の阿蘇都比咩をはじ





おんだ祭で神様の食事を運ぶ宇奈利たち。12の神様と、火の神、水の神を合わせた14の神様の食事を運びます。

め、十二の神がまつられています。
 健磐龍命と阿蘇都比咩の子どもの速瓶玉
 命は十一宮で、国造神社にまつられています。
 阿蘇神社と国造神社では毎年七月、「おんだ（御田）祭」が行われます。阿蘇大明神（健磐龍命）が阿蘇開拓と農耕の道を広めたことをたたえ、この時季の稲の育ち具合を神様に見ていただくことで、秋の豊作を願う祭ります。白装束を着た十四人の宇奈利が田園を巡ります。阿蘇神社の祭神は十二ですが、宇奈利が十四人なのは火の神と水の神を合わせるからです。国造神社は祭神四に火の神・水の神を合わせて六人の宇奈利です。



外輪山が唯一途切れている立野地域。「健磐龍命が蹴破った」という伝説があります。（立野火口瀬の西側からドローンで撮影）

健磐龍命にまつわる地名

熊本県内には健磐龍命にまつわる地名伝説が複数あります。その一部を紹介します。



2 的石 阿蘇市跡ヶ瀬
この石を的に矢を射た

4 数鹿流ヶ滝 南阿蘇村立野
蹴破って阿蘇湖を乾かしたとき、鹿が流れ落ちた

5 色見 高森町
国造りに旅立つ際に衣の色を染めて色の様子を見た





1 ふたえのとうげ
二重峠 阿蘇市車帰、大津町古城
山が二重になっていて蹴破れなかった

3 **立野** 南阿蘇村立野
蹴破ったとき「もう立てぬ」と言った

戸島山 熊本市東区戸島
阿蘇湖を流したとき、その土が山となった

なまず
鯨 嘉島町鯨
阿蘇湖を流したとき、
鯨が流れ着いた



奉幣、読経で「噴火鎮め」

火口に御幣を投入する
祈祷は千年以上続く

阿蘇山の異変は、国家的な変事の予兆と意識されていました。『日本後紀』延暦十五（七九六）年の条によると、神霊池の枯渇の知らせを受けた朝廷は貧しい民に対して施しを行い、寺々には三日間、読経させました。朝廷が行った神霊池の異変に対する施策の最初の記録です。

異変が起こるのは国を治める者の不徳のせいと考えられており、貧しい人びとに施しをすることが求められていたのです。

『続日本後紀』承和七・八（八四〇・八四一）

年の条によれば、神霊池が枯渇したとき、大宰府から朝廷に知らせていました。大宰府

は、現在の福岡県太宰府市にあった古代律令時代の役所です。

平安時代の歌人、源俊賴（一〇五五？～一一

二九？）が阿蘇について詠んだ歌があります。

世にわびて浪たちまちに有るなれど

あそのみ池に幣たてまつる

（源俊賴「散木奇歌集」）

源俊賴は、阿蘇の御池は世の中によくないことがあれば、突然波が立つので幣を奉ると詠んでいます。十一世紀の都の知識人が阿蘇山の噴火に関心を寄せていたことがうかがわれます。

平穏を祈って御幣を火口に投げ入れる「火口鎮祭」は現在も毎年六月に行われています。火口に対する祈りは、千年以上も続いているのです。

朝廷が読経のために
各地に僧侶を遣わす

六つの勅撰の国史、六国史の記事を事項別に菅原道真が編纂した『類聚国史』の延暦一三（七九四）年の条に、阿蘇社での読経に関する初めての記事があります。

豊前国八幡と筑前国宗像と肥後国阿蘇の三社で読経を行うために七人の僧侶を遣わした！。

八幡社は現在の大分県宇佐市、宗像社は福岡県宗像市にあります。

阿蘇では神霊池の異変に対して奉幣とともに読経が繰り返されていました。

『続日本後紀』承和五（八三八）年には、遣唐使の航海安全を祈念するために、二五歳以上で仏教に精進する持経者九人が得度者（僧侶）となり、香椎宮・八幡社・宗像社と阿蘇社にそれぞれ二人が置かれたと記されています。

神社で読経を上げると聞くと、違和感を持つ人がいるかもしれません。明治時代に行われた神仏分離の前は、「神仏習合」といって、地元の神様に対する信仰と、大陸から伝来した仏教とが密接に結びついていました。





山の平穏を願って、火口に御幣を投げ入れる「火口鎮祭」。千年以上も続いています。現在は毎年6月10日に行われています。



火口の平穏を願って祈祷します。

【神仏習合】

日本固有の神の信仰と外来の仏教信仰とを融合・調和するために唱えられた教説です。古来日本では山や海、森などの自然物に神々が宿ると信じられてきました。六世紀に仏教が伝来し、「仏が人々を救うために神という仮の姿で現れる」という説(本地垂迹説)によって、神仏習合は広がり、江戸時代まで続きます。子どもが生まれたら神社で祈願し、葬式は寺(仏教)で執り行うという人が多いのは、神仏習合の影響という見方もあります。

山林修行の聖地だった

霊山として畏敬された阿蘇 修行する僧侶が集まる

日本に大陸から仏教が伝来したのは六世紀ごろです。仏陀の教えの一つに山林修行があります。大宝元(七〇二)年に公布された大宝律令の「僧尼令」では、僧尼は俗と交わらずに静寂な山で修行するように定められていました。

奈良時代末、僧侶の中から都を捨てて各地の霊山に入って修行に励む者が多くなりました。その中から最澄は天台宗を開き、空海は真言宗を起こします。ともに山林修行を重んじて、都から離れた比叡山と高野山にそれぞれ寺院を設けました。

天台・真言の密教系山岳仏教が盛んになり、加持祈祷が呪術として重んじられるようになり、山岳で苦行を重ねた僧侶は験げん力が優れているとして尊敬を集めます。各地の山岳に籠って霊験を得ようと修行する僧侶は「行者」と呼ばれるようになりました。

火を噴く阿蘇山は霊山として人々の畏敬の対象であり、密教系の僧侶や呪術修行者たちが験力を得るため、山林修行にふさわしい

場所でした。僧侶たちが阿蘇で修行した記録が残っています。

泰澄が阿蘇社に参詣すると 九頭龍が出現した

平安時代後期の学者、大江匡房(一〇四一―一一一一)が著した『本朝神仙伝』には、修験の山として著名な加賀白山の開祖、泰澄が阿蘇社に参った時のことが書かれています。泰澄が詣でた時、池上に九つの頭を持つ九頭龍が出現した。泰澄が「真体を示せ」と祈ったところ、金色に輝く三尺の千手観音が夕陽に輝く池の上に現れた。

九頭龍に支配されていましたが、読経した

ことによって龍の真の姿が千手観音だと明らかになったというわけです。当時、都の人が阿蘇山を神秘的な霊力をもつ山として意識していたことを物語るものでしょう。

九州を代表する修験の山、英彦山の記録である『彦山流記』には、木練上人が阿蘇に登山したとき、ことが書かれています。

八種類の功德を持つ「八功德水」に満ちた宝池には五色の波が立ち、金色の浜には銀色の砂が敷きつめてある。真珠の木々の間には花が咲き乱れ、阿蘇の荘厳なさまは浄土さながらだ。

色とりどりの様子がうかがえます。

木練上人は宝池の主を拝みたいと一心に法華経を上げます。すると十一面観音が現





ぐらぐらと煮立った大釜の中に入る荒行もあり、周囲から驚きの声が上がります。



阿蘇火山博物館には古来の修験者(山伏)のイメージが展示されています。

れ、「重い罪があるお前には無理だ」と告げられます。木練が秘密の真言を唱えたと闇夜になり、九頭八面の大龍が現れ、のみ込まれそうになった木練が金剛杵こんごうしを投げると大龍の目に当たり、四方が晴れ渡りました。

帰途、大雨が降ったため小屋に立ち寄ると若い女に惑わされます。女の口にキスをする
と舌を切られ、女は大龍となって天に昇って
しまいます。

「再度登山するように」という天の声に促され、登山して懺悔すると十一面観音が蓮華に座って現れ、龍は宝池の主で十一面観音の化身であると説く。

木練の話からは、法華経信仰と山林修行者の密接な関係がうかがえます。



現在の阿蘇山西巖殿寺の「阿蘇山観音まつり」では、古式ゆかしい姿の修験者(山伏)たちが火渡りなどの荒行で無病息災を願います。

最栄読師が「阿蘇山」を開く

僧侶たちが集まって「阿蘇山」と呼ばれる

山上には僧侶たちが多く集まって住むようになり、「阿蘇山」と呼ばれるようになりま
す。「阿蘇山」は山の名前であると同時に、宗
教空間を意味していました。

宗教空間としての山は、「比叡山」や「高野
山」が分かりやすい例です。比叡山延暦寺は
天台宗の総本山で開祖は最澄、高野山金剛峯
寺は真言宗の総本山で、開祖は空海です。山
の名前を聞けば、信仰の対象としての山を思
い浮かべると思います。「阿蘇山」も同じよう
な響きを持っていました。

阿蘇山の開祖は最栄とされています。最栄
の出身に関しては二つの説があります。

「開祖」とされる最栄読師 出自には二つ説がある

一つの説は、最栄は天竺(インド)から来
て、神亀三(七二六年)に阿蘇山を開山したと
いうものです。

噴火口の湯だまり近くに庵を作って修行

をしていたところ、九つの頭を持つ九頭龍が
現れます。それは阿蘇神社の祭神、健甕龍命
の変化した姿でした。

龍は鷹に姿を変えて火口に飛び込みます。
最栄が中をのぞくと、争う亡者たちの仲裁に
入る十一面観音菩薩の姿がありました。最栄
はそこで見た十一面観音像を彫って、火口の
西に位置する洞窟に安置し、寺を開いたとさ
れます。

人びとはこれを西の巖殿(洞窟)と呼び、本
堂であるとしています。

もう一つの説は、阿蘇家に伝わるもので
す。最栄は比叡山の慈恵大師の徒で、阿蘇大
宮司の許可を得て、天養元(一一四四)年に開
山したというものです。慈恵大師は元三大師
とも称され、天台宗・比叡山を代表する僧侶
です。

最栄は自ら彫刻した十一面観音像を安置
して、常に法華経を読誦したので人々が「最
栄読師」と呼んだといっています。

十一面観音とはその名の通り、十一の面
(顔)を持つ観音像です。苦しんでいる人を救
うため、全方向を見守っているといわれてい
ます。奈良時代から多くの信仰を集め、つく

られてきました。

十一面には悟り、慈悲、憤怒、賛嘆、そして
大笑面の五種類の顔があるとされます。火口
の神様である健甕龍命の化身とされ、阿蘇山
に関する話の中に度々登場します。

山上本堂の内陣には十一面観音、脇侍の不
動明王と毘沙門天、外陣には最栄読師と慈恵
大師の像が安置されていました。この像は天
正十一年(一五八三)十一月一日、火山の噴
火で押し流されたと伝えられています。

噴火で押し流された像が戻って、再び本堂
に安置されたのかどうかは不明ですが、平成
の初めごろまで最栄読師と慈恵大師の像は、
本堂に置かれていました。後述しますが、本
堂は山上から明治四(一八七一)年に黒川村
(現阿蘇市黒川)に移転します。

ところが、残念なことに平成一三(二〇〇
一)年九月二日、火事が発生し、本堂もちろ
も焼失してしまいました。火事の原因は今で
も不明なままです。

この火災で二体の像だけでなく、掛け軸な
どの貴重な文化財も失われました。二体の像
の写真は、熊本県立美術館に残っています。



- 1 慈恵(元三)大師坐像
- 2 最栄読師坐像
- 3 「十一面観音立像」山上本堂本尊前立
(西巖殿寺蔵、熊本県立美術館寄託、熊本県指定文化財)
- 4 2001年の火災で焼失する前の本堂

(1 2 3 はいずれも画像提供・熊本県立美術館)

火口と神の「聖なるライン」

阿蘇大明神を神馬に乗せて
上宮から下宮へ迎える

北嶋雪山が寛文年間（一六六一―一六七三）にまとめた『国郡一統志』の阿蘇山の項に、阿蘇の嶺の神池は上宮、阿蘇郡中になつられている霊社は下宮と呼ばれていると書かれています。上宮は火口の池、下宮は現在の阿蘇神社を指します。

上宮と下宮という呼び方はいつ頃始まり、その役割はどうなっていたのでしょうか。健甕龍命の御子神で、国造初代の速瓶玉命（はやみたまのみこと）をまつっているのが、阿蘇市一の宮町手野の国

造神社です。

地図で国造神社と火口を結ぶと、その中間に阿蘇神社があります。古代信仰で重要な場所が直線状に位置する「聖なるライン」があるという見方があります。

神霊池の異変があるたびに奉幣や読経などの神事が執り行われていました。この神事を司祭していたのは阿蘇氏です。阿蘇氏は国造・阿蘇君の系譜を引いています。阿蘇社の神位が上昇するにつれて阿蘇谷から南郷へと勢力を増大し、平安時代後期には大宮司となります。武家領主の性格が強くなり、阿蘇社の神事は社家集団に任せられます。

阿蘇山の麓、現在の阿蘇市一の宮町宮地に社殿が設置された時期は明確には分かりませんが、正平一一（一三五六）年の史料に「近津御宮」、天授三（一三七七）年に「下宮」と記されています。阿蘇社の神事は下宮が中心となつていきますが、山上の神霊池は上宮として神事は継続されます。

上宮での神事を執り行ったのは、天宮祝と呼ばれる社家でした。

十二月には「駒取りの祭礼」がありました。天宮祝は山上に二十一日間、下宮では屋立ての女房と呼ばれる大宮司の息女が籠屋に百日間、それぞれこもって精進します。

祭礼では国府の役人三十三人が下宮に参拝後、神馬をひいて御嶽に登り、阿蘇大明神を乗せて下宮に下ります。下宮では屋立ての女房がご膳を準備しました。

上宮と下宮の関係を象徴する祭礼だったと推測されます。

天宮祝と僧侶の間で
供米や奉幣を巡って争いも

上宮の祭祀をつかさどる天宮祝と、山上に





阿蘇市一の宮町宮地にある阿蘇神社。全国に約五百社ある阿蘇神社の総本社です。熊本地震で大きな被害を受けましたが、復旧しました。



健甞龍命の子どもがまつられている国造神社。

住む僧侶たちの間で争いもありました。
史料によると、建久六（一一九五）年に天宮祝忠次と僧侶たちとの間で争いが生じ、天宮祝忠次が阿蘇庄の領家に訴えます。これを受け、阿蘇庄の預所職にあった北条時政と推定される平某が、御花米（供米）は住僧等の、その他の奉幣や神馬は天宮祝の取得分と沙汰を下します。天宮祝が僧侶の勢力に押されて得分を譲歩せざるをえなくなったことを示しています。

阿蘇山上に居住する僧侶がいることを示す最も古い史料でもあります。

噴火は大事件の前兆!?

山上に異変が起きたら 衆徒たちが阿蘇氏へ報告

十二世紀の文書からは、山上に居住する僧侶が「衆徒」と呼ばれていたことがわかります。ほかに行者がいて、それぞれの配下に山伏がいました。

衆徒は「阿蘇山衆徒何某」、行者は「阿蘇山行者何某」と名乗っていました。戒律を守って、顕經と密經に精進している僧侶の集団と自負していることがわかります。

征西大將軍宮良成親王から祈禱の依頼もありました。宛先は天授三(一三七七)年は「阿蘇社衆徒中」、弘和二(一三八二)年は「阿蘇山衆徒中」となっています。

衆徒たちは、宝池の異変を阿蘇氏に報告しています。神霊池の異変に対して、奉幣や読經などさまざまな神事を執り行っていました。

異変は至徳四(一三八七)年五月に上宮、つまり噴火口の「法施崎」と呼ぶ所に新しい穴が出現します。噴火口は「中の宝池」「北の宝池」「法施崎」と呼ばれていました。

「穴から濁水や砂石が沸騰して高さ一丈余

り吹き上げて、鯨が海に泳いでいるかのようであった。閏五月三日卯の刻に俄かに新穴が火口に変化して、黒煙をあげて火石を空高く吹き上げて日を追って勢いを増している」と報告しています。

噴火口の異変は、天下国家の大事件の前兆と意識されていました。江戸時代に作成された「阿蘇山上宮奇瑞記拔書」という文書があります。「奇瑞」とは前兆として現れた不思議な現象です。

暦仁元(一二三八)年一二月、御池に蛇が出現し、黒煙と大小の石が吹き上がりました。すると翌年二月、後鳥羽上皇が崩御したと記されています。

さらに「文永弘安の鳴動」についても記しています。

蒙古襲来の「文永の役」(一二七四年)と「弘安の役」(一二八一年)のときは、「宝池」が鳴動して大噴火が続いたと書かれています。

噴火口の異変が天下国家の大事件の前兆という考え方は、古代において朝廷が「神霊池」の異変を畏怖して、奉幣・祈禱を繰り返し続けたことにつながります。「神霊池」から「宝池」という表現に変わり、異変報告は山上

に住む衆徒たちが阿蘇山信仰の中心的担い手になったことを象徴しているといえるでしょう。

仏が神の姿で現れる 「本地垂迹説」を展開

阿蘇山衆徒たちは至徳五(一三八八)年、「阿蘇大明神は天下に重大事が起きるときは宝池に種々の怪異を顕し、度々注進してきて数えきれない」と報告しています。僧侶は一層法要に勤め、参詣する人たちは「礼尊」を仰ぎ奉るとしています。

十四世紀には衆徒は、仏が神の姿をとって現れるという本地垂迹説で、阿蘇大明神の信仰を展開していることが推測できます。

阿蘇大明神は本地仏である「十一面観音」の化身とされます。十一面観音像は上宮本堂内殿にまつられ、衆徒が護摩祈禱を行いました。上宮と本堂は一体として捉えられています。

山上本堂にまつられていた十一面観音立像は現在、熊本県立美術館に寄託されています。



十一面観音の脇侍の「毘沙門天立像」。
南北朝時代。



山上本堂本尊「十一面観音立像」。
平安時代後期。



十一面観音の脇侍の「不動明王立像」。
江戸時代。

(いずれも西巖殿寺蔵、熊本県立美術館寄託、熊本県指定文化財。画像提供・熊本県立美術館)



噴煙を上げる阿蘇中岳火口。噴火は国家の大事件の予兆と捉えられていました。

【本地垂迹説】

仏や菩薩が人々の前に表れるときにとる仮の姿が神であるとする、古神道と仏教の融合ともいえる考え方です。仏や菩薩が本体（本地）で、日本の神々は仏の化身（垂迹）だとされます。仏教普及のため、神への信仰との対立を避けるために工夫された論理とされます。十一面観音が本地仏で、阿蘇大明神（健甕龍命）は垂迹神です。

火口近く 三十七坊が並ぶ

一大霊場だった「古坊中」 読経がこだましていた

草千里ヶ浜から中岳火口に向かう草原は「古坊中」と呼ばれています。

「坊」はお坊さん、つまり僧侶のことです。山岳仏教の一大霊場だったころ、多くの僧侶が住み、読経がこだまし、お香が常にたかれ、ほら貝が吹き鳴らされていました。

最栄が自ら彫刻した十一面観音を安置する本堂を中心にして、三十七坊が設けられました。衆徒と行者にはそれぞれ配下に山伏がいました。「坊」は衆徒や行者の住まい、その下に位置する山伏の住まいが「庵」です。庵の数は資料が残っておらず、正確には分かりませんが、五十二庵とも、それ以上とも言われています。合わせて数百人ほどが住んでいたと見られています。今では想像できない壮観な景色が広がっていたことでしょう。

古坊中に関する資料はほとんど残っていませんが、当時の地形が分かる写真があります。旧阿蘇町が昭和三二（一九五七）年十二月二十四日、飛行高度二九八〇メートルから撮影したものです。冬の撮影のため積雪してお

り、土塁で囲まれた坊の区画がわかります。道も確認できます。

広さは約百〜三百坪が多く、千坪を超える区画もありました。

修行をする僧侶たちには複数の呼び方と階級がありました。山上の衆徒は大法師・権律師・法橋・阿闍梨などの僧位や僧階を名乗っていました。山上に常住して修行に励む行者（久住）もありました。

衆徒と行者には支配と服従の関係がありました。室町時代のものでとされる史料では、行者は衆徒に従順であるべきことを誓い、護摩供料として阿蘇山へ寄進された田地は衆徒の支配であるから衆徒の言い分に従うことなどを誓約しています。

行者と山伏は活動を制約されたため、阿蘇山から離山するという対抗策に出たこともあったそうです。

坊にはそれぞれ名前がつけられ、「成満院」「万福院」「学頭坊」などがありました。坊と坊の間にも格差があり、六坊が棟梁寺、棟梁寺の徒弟の三十一坊を門葉寺と称しました。

「〇〇院」「〇〇坊」という場合、文脈によって人を指すこともあれば、居住する坊舎を指すこともあります。坊舎は参詣者の宿坊にも使われていました。十歳以上六十歳未満の女性・尼が坊に泊まることは禁止されていました。坊の集まりが「坊中」です。

山伏が祈祷すると 境界争いに勝利した

山伏たちは地域でも活動していました。草部村（現高森町）にこんな史料が残っています。

永禄八（一五六五）年、隣接する日向国高千穂（現宮崎県）との間に境界を巡って争いが起きた。草部の二人が萱を切りに行き、高千穂の者たちと口論となった。高千穂勢が多勢であったために草部の二人は殴られて命からがらで帰宅。阿蘇山の養福坊に「境目の争いに草部が勝利できるように」と祈祷を依頼した。養福坊が清浄な地に祭壇を設けて草部の勝利を祈念すると、高千穂側は恐れをなして引き下がった。

この結果、草部郷の村に住む者は養福坊の檀家になったといえます。養福坊は那羅延坊配下の山伏です。



1957(昭和32)年12月に撮影された古坊中の空中写真。冬の撮影のため積雪しており、坊の区画がわかります。上が北で、左が草千里、右に火口があります。中央に阿蘇登山道路が見えます。



旧阿蘇町が1998(平成10)年に作成した古坊中跡地形合成図。古坊中跡現況地形測量図に、阿蘇山古坊中地形図(1930年作成、熊本県教育委員会蔵)を複合した図。上の空中写真とほぼ同じ場所で、右下に阿蘇山上広場があります。

【三十七坊の名前】

衆徒三十坊

学頭坊・成満院・万福院・大宝院・福満坊・得善坊・長善坊・成道坊・娯楽坊・新築坊・了寛坊・善性坊・浄光院・万楽坊・礼徳坊・大徳坊・成実坊・妙境坊・実門坊・福性坊

行者十七坊

道場坊・鏡観坊・鏡一坊・幸宝坊・那羅延坊・陽泉坊・極楽坊・了忍坊・鏡善坊・妙円坊・円達坊・慈眼坊・了実坊・鏡珍坊・密教坊・円鏡坊・幸密坊

僧侶たちの組織があった

阿蘇氏の規制と保護の下で 僧侶たちの組織を運営

三十七坊にはそれぞれ本尊として十一面観音像がまつられていました。今も阿蘇市には民家や寺などに複数の十一面観音像があります。立像のほか、坐像もあります。

三十七坊の衆徒や行者たちは組織をつくり、合議制で運営していました。この組織を「阿蘇一山」と呼びます。衆徒が交代で運営の責任者となる「年行事」役を定め、自立的に運営されていました。

火山活動が活発な阿蘇山上に建つ本堂の造営は度々必要でした。僧侶たちは造営の材料となる木材を確保するため、湯谷の杉を伐採することを禁じ、本堂の用木にすると定めていました。伐採すれば、科料(罰金)があったのです。

本堂造営は、阿蘇山を信仰する人たちから寄せられる寄付でまかなわれていました。

本堂が造立された後の供養の費用を負担していたのは阿蘇氏です。僧侶たちの組織は自立的な運営でしたが、大宮司を兼ねる武家領主、阿蘇氏の規制と保護の下にありました。

阿蘇大宮司の下に寺社奉行がいて、阿蘇一山の法式などについて相談し、科人(罪人)があれば隠さずに届け出ることが義務付けられていました。阿蘇氏の政治的動向は、阿蘇一山のあり方に影響を与えました。

阿蘇山上は冬、厳しい寒さとなるため、冬の間、衆徒たちは麓の里坊に下りたと思われます。現在の南阿蘇村の湯谷地区あたりに里坊があったようです。

白川水源があり、湧水が豊富です。酒を売買していた記録が残っており、里坊では湧水を使って酒を醸造していたとみられます。いわゆる般若湯と称して、参詣者に売っていたのかもしれない。

南阿蘇村には阿蘇山の開祖、最栄の墓があるとの伝承があります。

厳しい寒さとなっても、常駐する修行者、久住(行者)は山に残りました。今のように暖房もない時代、寒さに耐えることも修行の一つだったと思われます。

阿蘇山上のかつての本堂の跡には現在、阿蘇神社の奥宮である阿蘇山上神社があります。

鹿渡橋の記録あるも 場所は不明のまま

山上に行く途中に鹿渡橋という名前の橋がありました。しかし、文明一〇(一四七八)年に洪水により流されてしまいます。学頭坊長宣が再建するための造作次第を記録しています。

鹿渡橋は万人の通路として比類なき天下無双の橋であり、参詣のためにはこの橋がなければ叶わないと重要性を述べています。

橋の造営は古くから坊中の仕事でした。惣大工と山伏十二、三人で造成ができたことと記されています。

橋を渡る通行人からは「橋賃」としてお金を取りますが、参詣者は免除されていました。交通路としても不可欠な橋だったのでしょう。

しかし、現在、鹿渡橋はありません。どこに架けられていたのかも不明です。現在の南阿蘇村下野には「袋鹿蔵」「鹿洗」という鹿のつく地名があります。黒川を下れば、現在の南阿蘇村立野に数鹿流ヶ滝があります。鹿渡橋は恐らく黒川に架かっていたと思われます。

1



頭には11の面があります。



2



3



- 1 坊の子孫の家に保存されている十一面観音坐像。頭に11の顔(面)があります。室町時代の作とされます。熊本県指定文化財。
- 2 南阿蘇村立野にある数鹿流ケ滝。健磐龍命が外輪山を蹴破ったとき、鹿が流れ着いたという伝説もあります。
- 3 三十七坊の本堂があった場所にある阿蘇山上神社。今は拝殿だけとなっています。

争乱に巻き込まれ僧侶は四散

大友氏に支配された肥後 島津氏から攻略される

戦国時代、九州各地でもそれぞれ勢力を広げようとする動きがありました。

豊後の大友氏は肥後に勢力拡張を図り、肥後は大友氏の支配下に置かれます。阿蘇大宮司家は、大友氏の下で安定が続き、ました。

しかし天正六（一五七八）年、大友宗麟（義鎮）は日向耳川の戦いで北進をはかる薩摩の島津義久に大敗します。島津氏の進撃は続きます。同九年九月に八代・芦北・球磨を支配していた相良義陽は島津氏に降伏。島津義久は阿蘇氏を討つために、義陽に対して、義陽の盟友でもある阿蘇氏家老・甲斐宗運を討つことを命じます。義陽は同年十二月に響ヶ原（現宇城市豊野町糸石）で宗運と戦って討ち死にしています。

大友氏に属する宗運は島津氏との和平交渉にあたります。大宮司は阿蘇山衆徒の新築坊を使者として島津氏に和睦の文書を遣わしました。宗運によって和平が実現しますが、宗運はその後亡くなっています。すると島津氏は阿蘇氏攻略を開始し、阿蘇氏が

支配する城が次々と落城しました。

衆徒と行者は宗運が死去するとまもなく、島津氏の元に使節を送ります。行者は仁王経千座の祈祷巻数を御船にいた島津義弘（忠平）に届けています。翌日、衆徒の成満院と福満坊は守護の宿坊を巡って義弘に訴えます。義弘は宿坊について「満山談合」、つまりすべての衆徒たちによる話し合いによって決めるべきだと答えています。

また、島津氏の年寄が阿蘇山の年行事に宛てた書状が残っています。女性が泊まることのできないはずなのに、「阿蘇山が乱れている」と叱責しています。書状では阿蘇の僧侶たちが島津氏の支配下に置かれている状況がうかがえます。

寺は焼き払われ 阿蘇山の僧侶組織は没落

豊臣秀吉は九州平定のために天正一五（一五八七）年三月、大軍を率いて九州に進出し、島津義久を降伏させました。

度重なる争乱で阿蘇山上にあった寺院は焼き払われてしまったと伝えられています。

その結果、衆徒や山伏たちも行き場を失い、山を下り、四散していききました。この中で長善坊のみが残ったと伝えられています。古坊中の跡には、わずかに出土した石塔や土塁が残されています。

熊本県教育委員会が昭和五五（一九八〇）年にまとめた文化財調査報告書「古坊中」では、この地域で草地改良などが行われた際、石造物が出土し、「膨大な量であった」という関係者の話を伝えています。また、「昭和三十年代まで古坊中地区に坊跡とみられる方形の土塁が存していた事は黒川地区の多くの住民の記憶に残っている」としています。

古坊中に関して、過去に大学などが調査したところ、火山灰の下には古坊中時代の遺構が残存している可能性が示されました。本格的な発掘調査が計画されたことがあります。が、中岳の噴火により中止となってしまいました。

現在、広々とした草原が広がっている古坊中で、当時の隆盛を物語るものはほとんどなく、降灰（火山灰）でできた土壌の中に眠っています。



中岳西側に広がる古坊中。この地にかつて多くの僧侶たちが暮らしていました。



古坊中の案内板の傍らに石塔が残っています。古坊中時代の数少ない跡です。



阿蘇火山博物館には古坊中で使われていた土器などが展示されています。

加藤清正が坊を再興

朝鮮出兵で清正を援護 矢に「長善坊」の文字

豊臣秀吉による天下統一の後、肥後には加藤清正がやってきます。清正は、坊中を再興させます。

こんな言い伝えがあります。

加藤清正が朝鮮出兵に参加し、苦戦を強いられた。その時、おびただしい矢が飛んできて加藤軍を援護。清正は不思議に思い矢を拾ってみると、そこには「阿蘇山長善坊」の文字があった。その後、肥後に入国すると早速、長善坊を探し、城に招待した。長善坊は清正に坊中再建を願い出て、許可された。

清正は坊舎を復活させて、ばらばらになっていた衆徒・行者に帰ってくるよう命じます。この文書の宛先は「阿蘇大明神 長善坊寺社中」。古坊中が没落したとき、唯一残った長善坊が活躍を見せます。

長善坊は僧侶たちを呼び集め、黒川村（現在の阿蘇市黒川）に三十七坊を新しく設けます。清正は、勢力を持つ阿蘇氏と僧徒集団とのかかわりを破壊し、自らの監視下に置こうとしたとみられます。庵の数は五十二ともそ

れ以上とも言われています。

清正によって再興された坊中を「麓坊中」と呼びます。これに対して、山上にあったかつての坊中は「古坊中」と言います。

坊中は計画的に再興されます。東西に延びる道（旧道）の南側、火口に近い方に衆徒の坊舎が、北側に行者の坊舎が建てられました。

坊舎は神前、客殿、玄関、居間、台所という間取りで造られました。一番規模の大きい坊舎は字頭坊で、現在の阿蘇山西巖殿寺がある場所にあります。坊中という地名は今も残っています。昭和三八（一九六二）年まで阿蘇駅は坊中駅という名称でした。黒川地区には行者にちなんだ「行者通り」もあります。

近くには「長善坊の公孫樹いちじく」があり、加藤清正が植えたと伝わります。母親の病氣回復祈願のため阿蘇を訪れたとき、乗っていた馬をつないだとされ、別名「駒つなぎの公孫樹」とも呼ばれています。樹齢は約四百年、高さは十二メートルほどです。

復興した阿蘇一山の安永三（一七七四）年の総人口は六六八人だったと伝えられています。衆徒・行者が計五十二人、山伏四十三人、家来やその妻子などが住んでいました。

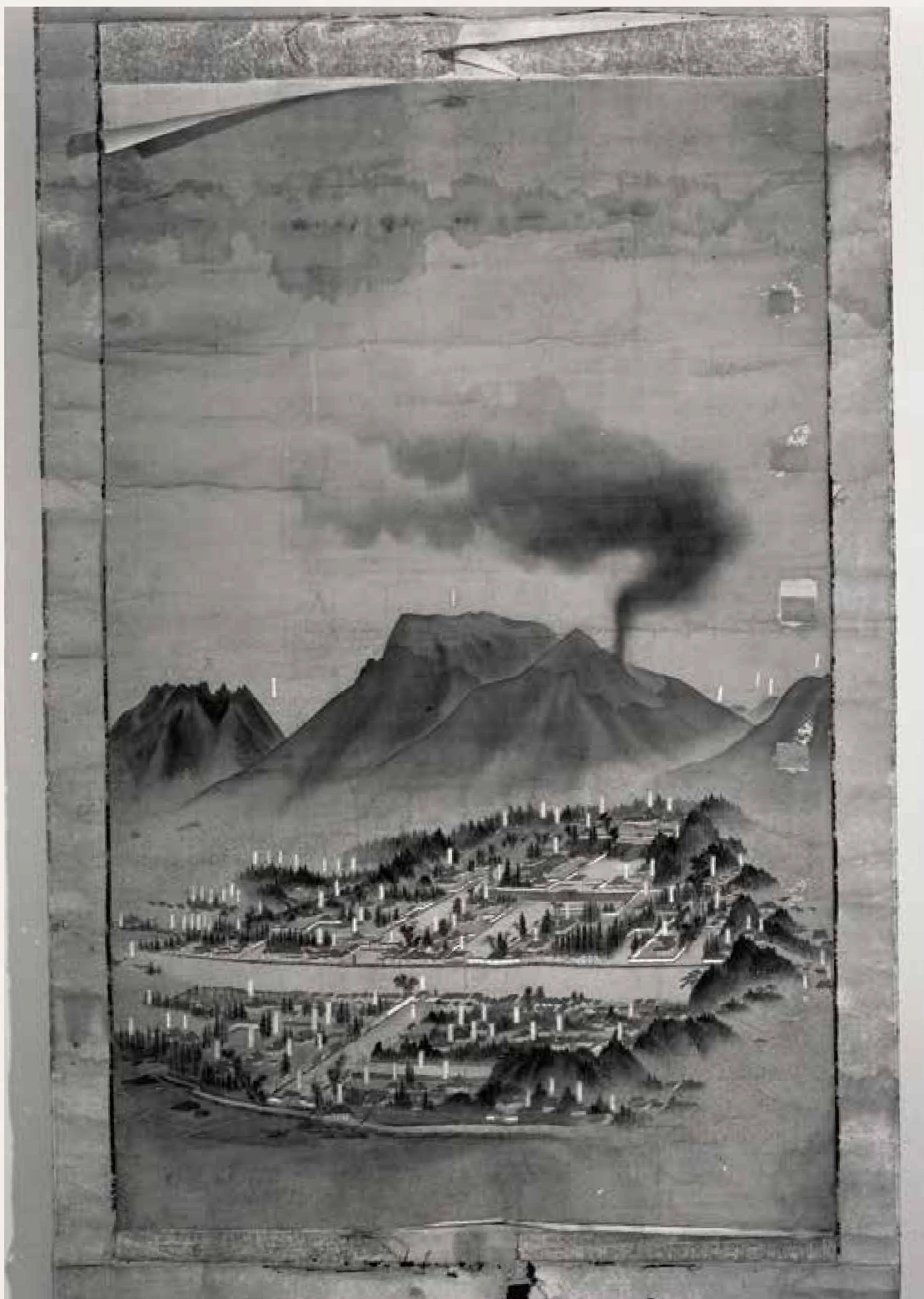
山上に本堂も再建され 三十余の堂社も造られる

山上には本堂（五間・九間）を中心に三十余の堂社が立ち並んでいました。本堂の内陣は本尊十一面観音と脇侍の不動明王、毘沙門天が安置され、外陣には右に最栄読師、左に慈恵大師がまつられました。

山上であるために傷みが生じて、本堂の大規模な再建が文化四（一八〇七）年春から始まり、翌年秋に完成します。再建工事は阿蘇郡内の人びとが行いました。

再建工事は本堂の部材では足りず、新規に資材を麓から険しい山道を運ぶ大工事となりました。阿蘇郡を挙げて人々が協力したほか、お金や材木の寄付などもあり、予算のほぼ半分の経費で完成しました。

加藤家の代わりに熊本藩主となった細川家から、五穀豊穰や雨ごい、台風被害防止を願う祈禱を命じられた記録も残っています。祈禱は命令や依頼によって行う場合もあれば、自ら行う場合もありました。



絹本著色麓三十六坊中図。坊中は三十七ですが三十六と称しています。この図は西巖殿寺所蔵でしたが、平成13(2001)年の火災で焼失してしまいました。(画像提供・熊本県立美術館)

隆盛を誇った麓坊中

(次ページに散策マップ)

阿蘇山の麓に再興された坊を描いた「麓坊中絵図」には、坊の名前が詳しく書かれています。阿蘇山に近い南側に衆徒の坊、北側に行者の坊や山伏の庵がありました。

図の中央付近で左右に延びる道路は旧道として今も残っています。斜めの道は、上側が仲小路通り、下側が行者通りです。仲小路通りの突き当たりには、階段が描かれています。現在の西巖殿寺の境内にあります。

1 麓坊中絵図

阿蘇山の麓に再興された坊を描いた「麓坊中絵図」。(西巖殿寺所蔵、熊本大学附属図書館寄託)画像提供:肥後の里山ギャラリー

2 阿蘇谷の風景

かぶと岩展望所から見た阿蘇谷の風景。「麓坊中絵図」に描かれた江戸時代の阿蘇山と同じく、頂上のギザギザが特徴の根子岳や中岳が見えます。

3 行者通り

行者にちなんだ「行者通り」があります。石畳で風情ある道です。

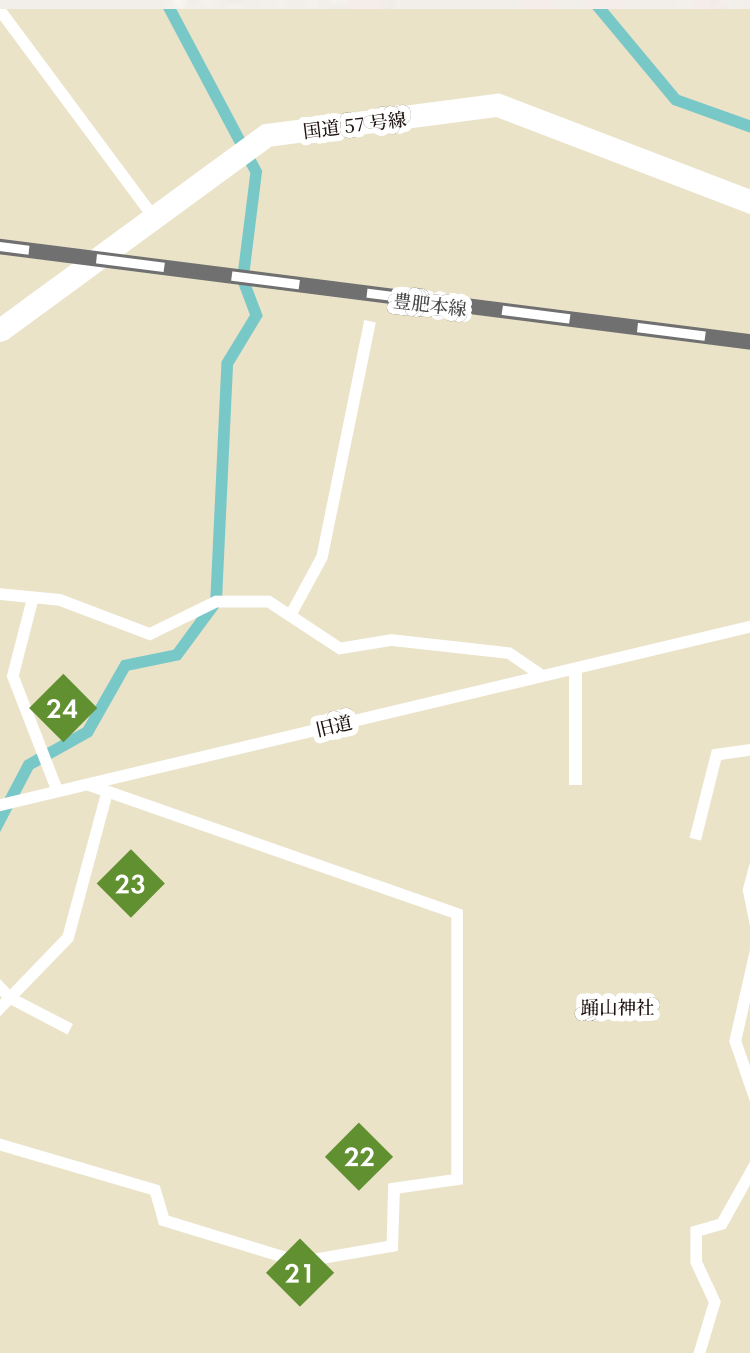
4 仲小路通り

旧道から西巖殿寺まで続く仲小路通り。約170メートルです。



1





A. 行者通り

修行僧である「行者」にちなんだ「行者通り」。石畳で風情ある道です。



B. 仲小路通り

仲小路通りは旧道から西巖殿寺までの約170メートルです。突き当りに西巖殿寺があります。



C. 長善坊の公孫樹

加藤清正が植えたとされます。清正の馬をつないだとも伝わります。

坊中散策マップ

阿蘇市黒川の坊中地区には、かつてたくさんの坊や庵がありました。当時に思いを馳せながら、かつて坊や庵があった場所を巡ってみませんか。JR阿蘇駅隣にある道の駅阿蘇を出発して、麓坊中の跡を散策するコースの一つを紹介します。

出典『熊本県文化財調査報告第49集 古坊中』(一九八〇年、熊本県教育委員会)



D. 西巖殿寺

坊中の中心的存在である西巖殿寺。階段を登れば本堂跡があります。



E. 山上本堂道の石塔

当時の人びとは歩いて阿蘇山上に登っていました。山上本堂へ通じる道には、印の石塔がありました。



F. 豪潮建立の宝篋印塔

玉名の天台宗寿福寺の高僧、豪潮(1749～1835)の宝篋印塔(ほうきょういんとう)。豪潮は書画にすぐれ、独特の宝篋印塔を各地に建立しています。



- 衆徒坊跡 1：学頭坊 2：成満院 3：万福院 4：大宝院 5：福満坊 6：長善坊 7：了覚坊
 8：浄教院 9：万楽坊
- 行者坊跡 10：道場坊 11：鏡一坊 12：幸宝坊 13：那羅延坊 14：妙円坊 15：円達坊 16：鏡珍坊
- ◆ 山伏庵跡 17：頼現坊 18：実相坊 19：福蔵坊 20：万祐坊 21：善了坊 22：円照坊 23：金光坊
 24：福泉坊 25：円林坊 26：覚祐坊 27：養福坊 28：本了坊
- ▲ 行者祈祷所跡

山に入って「峰入り」修行

七月から九月にかけ 十数年おきに入山

修験者が霊山に入って修行することを「峰入り」と言います。修験道の霊場、奈良県の吉野大峯(峰)山で始まったとされ、全国に広まりました。肥後・二代藩主・加藤忠広の母の病氣快癒を祈願するため、寛永七(一六三〇)年に二人の行者が吉野大峰に峰入りしています。

阿蘇でも吉野大峰を模して、「阿蘇大峰」として数年から十数年おきに、約一カ月にわたる大規模な修行が行われていました。阿蘇山は熊本藩の命によって、幕府や藩への祈禱をする特別な山岳寺院のため、峰入りの費用も藩から出されていました。

古坊中時代は春夏秋の三回、峰入りを執り行っていたとされますが、麓に坊中が再建された江戸時代は秋のみとなります。峰入りしたのは主に行者と山伏でした。五十人ほどが大宿・二宿・三宿と名付けられた三グループに分かれます。大宿は大越家^{だいこつげ}、二宿は中越家、三宿は護摩先達とも称しました。大宿が全体の指揮を執り、二宿、三宿は補佐をします。百人を超える大所帯だったときもありました。

初めて峰入りする山伏は新客、三度以上の山伏は先達と呼ばれました。新客が全体の三分の一ほど、多い時には半分を占めることもありました。

ルートや日程は決まっています。峰入りに先立ち七月二十六日は^{おひ}笈かざりで、神変菩薩・護摩・大日如来の三つの笈^{おひ}を飾ります。笈^{おひ}とは、背負って同行する仏様です。現在も残されている笈^{おひ}は、縦七六センチ、横五三センチほどの大きさです。丸い銅版に打ち出された仏様が安置されています。京都で作られたものです。峰入りに同行するとなるとかなり傷んでしまうようで、京都で修繕されていたようです。二十八日に阿蘇山上と堂社に参詣してから山に入ります。山上を出発し、麓坊中、現在の太津町、菊池市泗水町、山鹿市を経由して福岡県八女市黒木町、同市星野、大分県日田市をめぐり、九月三日に阿蘇に帰ってくるルートです(次ページ参照)。

目的は天下泰平・国家安全・五穀豊饒さらに武運長久・子孫繁栄を祈念するものです。山々を巡りながら、各地で護摩祈禱や参詣をします。祈禱するお堂や庄屋の家などに泊まります。

峰入りの一行を 各地は酒迎えて歓待

峰入りの一行に対して、コースの道筋の村々ではご馳走で歓待します。これを酒迎えと呼び、ご馳走の内容は吸い物や肴、お神酒などでした。一行は村のお堂で護摩祈禱など勤行して、「奉修練阿蘇大峰天下太平五穀成就祈所」と書いた札を納めます。

菊池の隈府町(現菊池市)の「嶋屋」の屋号を持つ商人による「嶋屋日記」には、阿蘇峰入りの一行を見物に出かけたことが書かれています。阿蘇峰入りは僧侶たちだけでなく、ルートになった地域にとっても一大イベントだったようです。

峰入りの後、熊本藩主に「武運長久・天下泰平・五穀成就祈願、城内安全祈所」のお札が献上されます。お世話になった宿や酒迎えを受けた村々には、お礼の品が送られました。

峰入りの一行は必ず山鹿市鹿北町の「鏡観坊」に立ち寄りました。鏡観坊という行者が峰入りの途中で息絶えてしまい、この地に眠っているとされます。鏡観坊の墓で供養をしたそうです。

1



1 丸い銅版に仏様が安置された「笈仏」。峰入り修行で背負って同行しました。(西巖殿寺所蔵、熊本大学附属図書館寄託)画像提供:肥後の里山ギャラリー

2 山鹿市鹿北町にある鏡観坊の墓(山鹿市指定文化財)。峰入りのときに一行が必ず立ち寄って供養しました。

2



山から山へ…厳しい峰入り

阿蘇山峰入りは、「天上掛道方」「土路（泥掛道方）」の二つのコースがあります。ここでは「天上掛道方」コースを紹介します。五里半（約二一〇キロメートル）の道のりです。

峰入りは熊本藩への許可が必要で、前年冬に寺社奉行へ届け出ます。春ごろ藩から許可が下り、山上に立てる札や護摩札木が用意されます。また、峰入り中の食料や宿などの準備をします。道案内や荷物の運搬なども依頼します。

阿蘇山の峰入りは藩を越えるため、久留米

藩や日田代官所にも往来手形を申請していました。

出発は七月二十八日で、山上で本堂はじめ各堂に参詣して、麓坊中の祈祷所に泊まります。

七月二十九日は大津の平川淀姫宮、三〇日は泗水の住吉宮、八月一日は山鹿大宮、二日は岩野宮に宿泊。三日は鏡観坊に立ち寄ってお経を上げました。ここから筑後（福岡県）に入ります。この辺りから天上掛道方と土路（泥掛道方）のコースに分かれます。

八月は筑後と豊後（大分県）の山々一帯を渡り歩き、東回りで阿蘇に戻ります。九月二日には「箱石の行場」で秘密の作法があったとされます。箱石は阿蘇市と高森町を結ぶ国道265号沿いにあり、重箱を重ねたような奇石です。九月三日は、松明を灯して阿蘇山上に登り、宝池を巡って山上本堂内陣に爰仏を立てます。

約一カ月の長旅となるため、途中、阿蘇から米やみそ、しょうゆなどの食料が届けられていたようです。

約一カ月の長旅となるため、途中、阿蘇から米やみそ、しょうゆなどの食料が届けられていたようです。



阿蘇市と高森町を結ぶ国道265号沿いにある箱石。峰入りでは箱石の行場で秘密の作法をしていました。



今も続く「峰入り修行」

三重県名張市の金峯山修験本宗、紫雲山慈唱院では、現在も大峯山脈を中心とした霊山での入峯（峰）修行をしています。修験者たちが峰から峰を渡る厳しい修行です。一般の参加もできるそうです。

画像提供・紫雲山慈唱院



阿蘇の守り神「乙護法」

役行者が阿蘇山に登山 天童が回峰修行を伝える

天童は子どもの姿に変身して現れた神様であるとされます。天童の姿をした「乙護法像」が衆徒や行者、山伏の子孫である阿蘇市の複数の民家に保存されています。乙護法は「オトゴサン」と呼ばれ、阿蘇の守り神として大切にされています。子孫から預けられた像



西巖殿寺所蔵の乙護法立像。江戸時代の作とされ、総高64.7センチ、像高は54.0センチです。

もあり、西巖殿寺には複数の像があります。

熊本県教育委員会がまとめた文化財調査報告書「古坊中」では、乙護法像は三十〜六十センチほどの大きさで、二十八体が確認されたとされています。

特徴は、髪は縮れて肩までの長さ、肩にシヨールのような布をかけ、おなかの前で両手を集め、右手に金剛杖、左手に独鉈ひとりくわ杵を持ちます。

「塩買い乙護」と呼ばれる像があり、旧暦の九月二八日を祭日としてまつています。ある祭日に塩がなくて困っていると、堂の下に塩俵が転がっていたと伝わります。

天童に関する言い伝えがあります。

飛鳥時代、奈良の葛城山に役小角えんのおづめという呪術家がいた。役小角は理想の修行者とみなされて役行者と呼ばれるようになる。

白鳳三(六七四)年、役行者が阿蘇山奥の峰に登山した時、山が赤色に変わって光がさし、窟から阿蘇山を守護する天童を名乗る声がして、峰を回る修行の基礎を伝えた。

衆徒や行者が描いた起請文にも「天童」の文字が登場します。阿蘇の峰入りとも関係が深く、峰入りは「大聖乙天童阿蘇大峰修行」と言われます。役行者(神変菩薩)の笈おしを担ぎ、スタートとゴールでは役行者堂で勤行しました。

天童は垂迹神で現れ 本地の仏は不動明王

加藤清正が坊中を復興させた後、本堂なども山上で再興します。その中に「乙護法社」が

ありました。ここでは乙護法講が開かれていました。山上にまつられていた乙護法は室町時代作で像高一七センチメートルの立派な像です。

乙護法の由来があります。佐賀県と福岡県にまたがる背振山の権現である乙天は、仏法を守る勇敢な神様です。この童子は乙丸と名乗り、「乙護法」と呼ばれるようになったとのことです。

仏(本地)が神(垂迹神)の姿をとって現れるという本地垂迹説で、「大聖天童」は垂迹、



山上本堂にあった乙護法立像(現在は西巖殿寺所蔵)。阿蘇市で確認された像の中では最も大きく、「古坊中」によると総高142.8センチ、像高117センチ、室町時代の作とされます。

本地は「不動明王」とされます。峰入りで大聖乙天童(乙護法)を掲げたのは、不動明王の垂迹とみなして信仰されていたからだと思われます。

乙護法に対する信仰は、阿蘇地域のほか、荒尾市や玉名市、熊本市、上益城郡などでも広がっていた記録が残っています。

久木野村(現南阿蘇村)では、ある家で立て続けに病気で亡くなる不幸が続きました。阿蘇山上から落ち延びていた一蔵坊という山伏の怨霊が原因でした。一蔵坊は年貢米が納



衆徒の子孫が管理する「乙護法堂」。5体の乙護法をまつっています。

められない村人の代わりに納めましたが、返してもらえなかったことを恨んで、乙護法に呪力を加えて地中に埋めます。この怨霊が不幸を引き起こしただけでなく、一蔵坊自身も死後、苦しんでいました。原因を突き止め、怨霊を取り除いたのは妙円坊の下山伏魔蔵坊です。そのお礼のため、久木野地区の代表者は昭和五十年代頃まで毎年、妙円坊の子孫の家に来ていたそうです。経緯を記した文書が残っています。



今に伝わる「乙護法」の数々

阿蘇市には「オトゴサン」と呼ばれる乙護法像が複数あります。阿蘇の守り神として伝わります。

※像の高さや時代などは熊本県文化財調査報告「古坊中」による。



- 1 個人蔵
総高67.0センチ、像高56.0センチ、江戸時代
- 2 個人蔵
総高41.7センチ、像高36.0センチ、江戸時代
- 3 個人蔵
総高35.8センチ、像高29.0センチ、江戸時代
- 4 個人蔵
総高47.1センチ、像高38.6センチ、鎌倉時代
- 5 個人蔵
像高57.0センチ、江戸時代 体前面に焼傷
- 6 個人蔵 像高33.0センチ、江戸時代
- 7 西巖殿寺所蔵
総高49.0センチ、像高42.0センチ、江戸時代
- 8 西巖殿寺所蔵
総高34.0センチ、像高24.5センチ、江戸時代
- 9 西巖殿寺所蔵
総高53.5センチ、像高46.0センチ、江戸時代
- 10 西巖殿寺所蔵
総高48.0センチ、像高40.0センチ、江戸時代
- 11 木造制吒迦童子立像 西巖殿寺所蔵
総高63.0センチ、像高55.0センチ、江戸時代



彼岸にはオンダケサンマイリ

彼岸には大勢の参拝客 商人たちの店も並ぶ

春と秋の彼岸には、阿蘇山に参拝する人が大勢いました。「オンダケサンマイリ」と呼ばれ、現在も熊本県内に代表者が交代で参拝する地区があります。結婚前に参拝して、夫婦の契りを交わすという風習もありました。

彼岸になると、山伏たちが交代で山上に詰めて、香花を供えて勤行をします。山伏たちは参拝客の道案内などもしていたようです。山上には本堂のほか、堂社が三十余りありました。参拝者はどの堂社に参るか、選ぶのも楽しみのひとつだったようです。

参拝客を相手に、商人たちが店を出していました。宝永四（一七〇七）年、山上本堂前の左右の敷地について、衆徒の成満院と万福院が「もともとは自分たちの坊舎だった」として支配したいと願い出ましたが、叶いませんでした。彼岸参りに多くの人が来てにぎわっていたことを示すものでしょう。

彼岸の翌日、不思議な現象が起きたと伝えられます。

彼岸翌日には必ず、御池（噴火口）から水が

湧いてきて、山中にあふれ、登山した人たちの不浄を洗い流す！。

事実かどうかはともかく、そう信じられていたことは興味深いことです。

参拝のため渡る「左京が橋」 行いが悪い人は渡れず

山上近くに橋がかかっていました。この橋を渡らなければ参拝には行けません。こんな伝説があります。

左京某^{なにかし}という若い武士が、この橋を渡ろうとしたところ、小さな蛇がいたので、「行く手を遮る」とばかりに斬りかかった。するとたちまち風雲が立ち昇り、小蛇は飛龍となって雲隠れした。武士は天地の異変におののき亡くなってしまった！。

以後、この橋は「左京が橋」と呼ばれるようになりました。次のような言い伝えもあります。

肥後熊本のある米屋では、八合のお米を「二升」と偽って売っていた。その米屋の娘、お清が友達と念願かなって阿蘇参りに出かけたときのこと。左京が橋を渡ろうとしたお

清は大蛇に変身してしまい、渡ることができなかった！。

両親が強欲だったことから、「親の因果が子に報い」という因果応報を説いています。

左京が橋は「写経が橋」だったという説もあります。阿蘇山開祖の最栄が一字一石の写経をして埋めた橋で、邪悪な心の持ち主は法華経の功名によって苦しみ、渡ることができないといわれています。

いずれも行いが悪い人は渡れないため、無事に渡れたら結婚相手になれるとして参拝されていたようです。

【山上にあった堂社の名前（二部）】

本堂、中宮権現社、山王権現二十一社、乙護法社、役行者堂、拜所鳥居、不動小社、毘沙門小社、甲佐明神小社、一ノ鳥井、住吉明神小社、上品橋、春日明神小社、遥拝鳥井、伊勢小社、十杜明神小社、天岩戸不動小社、八幡小社、加茂小社、田鶴原小社、文珠堂、聖徳太子堂、郡浦明神小社、中品橋、荒神小社、伽藍小社、祓川水神小社、乙姫小社、壹ノ護法、山上打越水神社

1



2



- 1 行いが悪い人は渡れないとされた「左京が橋」の跡。小さな橋になっており、現在、神事以外は立ち入り禁止となっています。
- 2 阿蘇五岳はお釈迦様が横たわっている姿に見えることから「涅槃像」と言われます。田んぼに水が張られて逆さに写る涅槃像は壮観です。この山を目指して多くの参拝客が集まってきました。

明治維新で三十七坊は廃寺に

廃藩置県で寺領地返還 扶持米もらえず存続できず

多くの人でにぎわっていた麓坊中ですが、明治になると再び試練に直面します。

江戸幕府を倒した明治新政府は王政復古をスローガンに神仏分離・国家神道の政策を推進します。

神仏習合の状態にあった神社仏閣では、徹底して仏教色が排除されます。神社に奉仕している僧侶たちに、剃髪をやめさせ、僧籍から離れることを求めます。

阿蘇大宮司惟治は神仏分離策を主導権回復の機会ととらえ、僧侶たちを僧籍から離れさせ、神職にしようとしています。しかし、阿蘇社と阿蘇山を対等に扱っていた細川藩は拒否し、これまで通り藩の寺社奉行が指図するとなりました。

僧侶たちに今後の意向を聞いたところ、住職を続けたいと希望したのが衆徒十坊、行者二坊。神職を選出したのは行者四坊でした。神職を選出した行者は寺号が廃止となり、仏体・仏具は阿蘇一山へ移されました。

明治三(一八七〇)年、藩から寺社に対して

支給されていた米(扶持米)が一代限りと決められます。翌年、廃藩置県で細川藩自体がなくなつたため扶持米もなくなり、寺として存続していくことができなくなりました。多くの寺は廃寺に追い込まれます。

明治四(一八七二)年十一月、阿蘇山に奉納された宝物が神器と仏器に分けられて、神器とされた刀剣十振が阿蘇社に引き渡されました。

元衆徒成満院弘英(改め谷婦)は「廃寺に当たり、仏体法器のみ拝領し、寺から出て行かざるを得ない」と、無念の思いを書き記しています。

山上にあった堂社のうち、本堂と山王堂、乙護法堂は村人たちが担いで麓に下ろし、黒川村の衆徒御祈禱所跡に移しました。日本の伝統的な様式で建てられていたため、解体して木材を運び、再び組み立てることが可能だったのでしょう。大変な重労働だったと思われる。

山上には堂社が三十数社ありましたが、やっと運ぶことができたのは三社だけでした。残った二十数社は長い間、風雨にさらされ、消滅したと思われます。



山伏の墓であるヤンボシ墓



明治23年、阿蘇山上の旧本堂近くに「西巖殿寺奥の院」が建てられます。熊本地震や噴火で被災しましたが、再建されました。

芦北から寺を移転 新しい「西巖殿寺」に

麓に下ろされた本堂には仏像などに加えて、還俗した各坊からの仏物も多数納められていました。しかし、僧侶たちがいなくなり、管理する者がいません。坊中周辺には寺がなくなり、葬式などの法要が困難になりました。

元衆徒たちが中心となって打開策を検討し、葦北郡田浦（現葦北郡芦北町）の法雲寺を迎えることとなります。法雲寺は阿蘇山と同じく比叡山延暦寺末西覚院で、阿蘇一山と同じ法流でした。法雲寺は神仏分離によって檀家が減り、経営が困難な状況でした。

明治九（一八七六）年、阿蘇への移転願を熊本県令に提出し、聞き届けられました。法雲寺の住職が黒川村に来て、元字頭坊舎を庫裏にして、引き続き住職を務めることとなりました。

黒川村の人々が法雲寺の寺号を由緒ある阿蘇一山の総寺号である西巖殿寺に改称したいと要望し、明治二三（一八八〇）年に認められ、新しく阿蘇山西巖殿寺が誕生します。

明治二三（一八九〇）年、阿蘇山上の旧本堂の西寄りに「西巖殿寺奥の院」が建てられました。平成二八（二〇一六）年の熊本地震や噴火で被災しましたが、その後再建されました。「良縁に恵まれる」として「恋人の聖地」に認定されています。



明治13年に誕生した阿蘇山西巖殿寺。法雲寺という寺号でしたが、地元の人の要望で「阿蘇山西巖殿寺」に改称が許可されました。

1545(天文14)	阿蘇惟豊、阿蘇山に後奈良天皇宸筆の般若心経を奉納（「西巖殿寺文書」）
1582(天正10)	下野狩廃絶（「近世阿蘇神社文書」）
1583(天正11)	宝池より霊水流出し、本堂打破、最栄読師及び慈恵大師の像が流される（「西巖殿寺文書」）
1587(天正15)	秀吉の九州下向により、阿蘇山寺院没落（「西巖殿寺文書」）
1592(文禄1)	阿蘇大宮司惟光、秀吉の命で自害
1599(慶長4)	加藤清正、阿蘇社と坊中の復興を命ずる（「西巖殿寺文書」）
1601(慶長6)	加藤清正、肥後全領(人吉相良領、天草を除く)及び豊後三郡を加えた五十四万石を拝領 加藤清正、阿蘇惟善(惟光弟)に阿蘇郡内三百五十八石余の所領を宛行う（「阿蘇家文書」）
1613(慶長18)	修験道法度制定
1628(寛永5)	阿蘇山行者、当山派(真言系山伏)として大峰の峰入りに同行（「近世阿蘇神社文書」）
1630(寛永7)	加藤忠広、母の病氣快癒の大護摩祈祷のため、当山派内山永久寺に阿蘇山行者二人の大峰入りの同行を依頼（「近世阿蘇神社文書」・「西巖殿寺文書」）
1632(寛永9)	加藤忠広、改易 細川忠利、豊前小倉より肥後転封
1633(寛永10)	細川忠利、阿蘇神主・社家・衆徒・行者などの所領安堵（「阿蘇家文書」・「西巖殿寺文書」）
1643(寛永20)	延暦寺三院執行天海、阿蘇山に掟書を下す（「西巖殿寺文書」）
1653(承応2)	衆徒・行者が対立し、行者に掟違反ありと五坊が追放処分（「西巖殿寺文書」・「肥後国誌」） 阿蘇山、比叡山末から東叡山末となる（「西巖殿寺文書」）
1655(明暦1)	彼岸に衆徒方と行者方から二人の僧侶が山上本堂に勤める（「西巖殿寺文書」）
1656(明暦2)	春秋の彼岸に衆徒方と行者方からそれぞれ山伏三人が山上にのぼり、内陣に香花を供えて勤行（「西巖殿寺文書」）
1687(貞享4)	細川綱利、比叡山東塔南谷禅林院大僧都舜敬法印を学頭坊に招き、新規に百石加増（「阿蘇家文書」・「西巖殿寺文書」・「寺社例帳」）
1692(元禄5)	学頭坊禅林院、万福院蔵「乙護法講式」を書写し、比叡山東塔南谷清泉院に寄進（「魚山叢書」）
1707(宝永4)	衆徒成満院と万福院が山上本堂前の元屋敷に春秋彼岸の小屋懸裁許権を願うが叶わず（「類寄寺社例帳」）
1783(天明3)	橘南谿、阿蘇山に登り、阿蘇宮を参拝し、阿蘇神主家に宿泊 → 「西遊記」
1805(文化2)	豪潮、坊中に宝篋印塔を建立
1807(文化4)	山上本堂再建着手、翌年成就（「町在」）
1818(文政1)	野田泉光院、阿蘇山登山、阿蘇宮を参拝し、坊中で実相坊より山中式法を聞く → 「日本九峰修行日記」
1835(天保6)	細川藩による阿蘇宮造営開始、斧始め式（「町在」）
1836(天保7)	阿蘇家火災、多くの文書を焼失
1851(嘉永4)	阿蘇宮造営終了（「町在」）
1868(慶応4)	神社別当及び社僧の復飾令。神仏判然令。別当社僧の還俗令
1870(明治3)	神仏混淆引き分けにより仏門に阿蘇山の号を用いることが禁止され、鎮国山と改める（「西巖殿近世文書」・「寺社雑款」） 社寺領土地令 熊本藩、社寺禄制を制定（「県政資料」）
1871(明治4)	廃藩置県 社寺禄制廃止（「県政資料」）→麓坊中の各坊の廃寺・転住 麓坊中の廃寺により、山上より本堂を衆徒祈祷所跡に下ろす → 山上の本堂跡に阿蘇神社の山上神社を建立
1872(明治5)	修験道廃止令
1876(明治9)	葦北郡田浦の法雲寺を黒川村に移し、住職野坂帰水、元学頭坊舎を庫裏とする（「野坂家文書」）
1880(明治13)	法雲寺の名称を西巖殿寺と改称
1890(明治23)	西巖殿寺、旧阿蘇山本堂の西よりに本堂を建設、麓の本堂は根本中堂と改める
1896(明治32)	夏目漱石、阿蘇社参拝 → 「二百十日」
1982(昭和57)	阿蘇の農耕祭事、重要無形民俗文化財指定
2001(平成13)	西巖殿寺本堂焼失
2001(平成19)	阿蘇神社(一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門)、重要文化財指定

2011年3月3日作成 佐藤 征子

「阿蘇の信仰と歴史」年表

	阿蘇山噴火活動に対して祭祀を行う（『隋書』倭国伝）
	神武天皇皇子、神八井耳命は火君・大分君・阿蘇君らの祖（『古事記』神武天皇）
	阿蘇国に阿蘇都彦・阿蘇都媛の二神あり（『日本書紀』景行紀）
	神八井耳命の孫、速瓶玉命を阿蘇国造とする（『先代旧事本紀』国造本紀）
713（和銅6）	阿蘇岳の頂上に霊沼があり、中岳は阿蘇神宮という（『筑紫風土記』逸文）
726（神亀3）	天竺毘舍利国の最栄、阿蘇社に参詣し、阿蘇明神の姿を感じ、本地仏十一面観音を仏閣に安置（『阿蘇山旧記抜書』）
794（延暦13）	僧等定らが八幡・宗像・阿蘇三神社に遭わされて読経を行い、度者（僧侶）が七人が定められた（『類聚国史』）
796（延暦15）	阿蘇山上の沼、神霊池が涸減、卜筮は早疫、毎寺三日齋戒・読経・悔過、賑給（『日本後紀』）
823（弘仁14）	従四位下健磐龍命神は早の時祈れば即座に降雨、護国救民の神、封戸二千（二十？）戸付される（『日本紀略』）
825（天長2）	神霊池涸減、卜筮は早疫、毎寺齋戒、賑給、調・庸免除（『類聚国史』）
838（承和5）	遣唐使の航海安全を祈願するために香椎宮・八幡大菩薩宮・宗像神社・阿蘇神社に度者九人（阿蘇神社は二人）が充てられた（『続日本後紀』）
840（承和7）	神霊池涸減、伊勢大神宮へ祈祷（『続日本後紀』）
841（承和8）	神霊池涸減、卜筮は早疫、毎寺齋戒・薫修、毎社奉幣、賑給、雑徭軽減（『続日本後紀』）
842（承和9）	崇りによって、宗像神・竈門神・健磐龍命神など諸社に奉幣（『続日本後紀』）
864（貞観6）	健磐龍命神霊池沸騰、比売神嶺三石神の内、二石神頽崩、卜筮は水疫（『三代実録』）
865（貞観7）	神霊池沸騰、卜筮は兵疫、毎寺薫修、毎社奉幣、賑給、租税免除（『三代実録』）
866（貞観8）	阿蘇大神怒気、卜筮は兵疫、国司潔斎、奉幣並金剛般若経千巻・般若心経万巻転読、大宰府城山四王院で金剛般若経三千巻・般若心経三万巻転読（『三代実録』）
867（貞観9）	健磐龍命姫神の山嶺、五月十一日夜奇光、十二日朝振動で崩（『三代実録』）
927（延長5）	肥後国四座、阿蘇郡三座（健磐龍命神社・阿蘇比咩神社・国造神社）、玉名郡一座（疋野神社）（『延喜式』神名帳）
1049（永承4）	阿蘇社焼亡（『百鍊抄』）「帝王編年記」には三月阿蘇社神殿焼亡と記す
1116（永久4）	阿蘇社焼亡（『百鍊抄』）
1144（天養1）	比叡山慈恵大師の徒、最栄が阿蘇大宮司友孝の許可を得、阿蘇山に居住（『阿蘇宮由来略』）
1168（仁安3）	栄西、入宋に際し、豊前の宇佐・肥後の阿蘇嶽で修行し、筑前の筥崎宮・香椎宮などに航海の安全を祈願（『千光祖師年譜』）
1195（建久6）	北条時政、天宮祝と阿蘇峰に居住する僧等の争いを裁定（『阿蘇家文書』）
1289（正応2）	北条貞時（時宗子）、阿蘇上宮へ太刀を奉納（『阿蘇家文書』）
	幕府、肥後一宮阿蘇社に剣・神馬を奉納（『阿蘇神社文書』）
1290（正応3）	幕府、阿蘇社に異国降伏の祈祷を命ずる（『阿蘇神社文書』）
1340（暦応3）	宝池鳴動、黒白の煙が蒼天を覆って大噴火となる、上下両所大行事の社が破損（『西巖殿寺文書』）
1352（正平7）	阿蘇山衆徒等、起請文（十歳以上六十歳未満の女性尼を住坊へ止宿禁止）（『阿蘇家文書』）
1356（正平11）	衆徒内談（衆徒衆議）（『西巖殿寺文書』）
1374（文中3）	阿蘇嶽妙円坊職譲状（『西巖殿寺文書』）
	芝原大夫将監大神政藤、阿蘇山乙護法社に高千穂荘上村内冬野及び栗原を寄進（『肥後国誌』）
1375（永和2）	霊水流出による洪水のため本堂流出（『西巖殿寺文書』）
1375（天授1）	懷良親王、阿蘇山に仏舍利を奉納（『西巖殿寺文書』）
1382（弘和2）	征西大將軍宮良成親王、阿蘇山衆徒に祈祷を囑す（『西巖殿寺文書』）
1387（至徳4）	阿蘇山衆徒等注進、肥後国鎮守正一位阿蘇大明神上宮奇瑞事（『阿蘇家文書』）
1388（嘉慶2）	阿蘇山衆徒等注進、肥後国正一位阿蘇大明神御宝池怪異事（『阿蘇家文書』）
1433（嘉吉3）	阿蘇山本堂供養（『西巖殿寺文書』）
1484（文明16）	阿蘇惟忠、阿蘇山新築坊職を安堵（『阿蘇家文書』）
1485（文明17）	幕の原合戦、阿蘇惟憲（惟忠子）・相良為統連合軍が阿蘇惟歳・惟家父子・菊池重朝連合軍を益城郡馬門原（現上益城郡山都町）で破る。惟歳・惟家は没落。
1512（永正9）	阿蘇惟豊、衆徒方陽泉・極楽・那羅延の三坊職を行行者方に補し、衆徒方二十坊・行者方十七坊となる（『阿蘇家文書』・『阿蘇宮由来略』）

「古坊中」調査を振り返る

日本山岳修験学会 佐藤 征子（本誌監修）

熊本県教育委員会は昭和五三（一九七八）年度・昭和五四（一九七九）年度にかけて、文化庁の国庫補助金を受けて、古坊中遺跡調査を実施した。昭和五三年度に古坊中遺跡関連資料の調査を行い、五四年度は現地発掘調査が予定されていた。ところが、昭和五四年六月に阿蘇中岳が大爆発を起こし、現地調査は出来なくなった。代わって、西巖殿寺近世文書の調査・古坊中関係の伝承調査・金石文・仏像などの調査が行われた。私は調査員の一人として参加し、西巖殿寺ご住職および衆徒・行者さらに山伏の末裔の家々を訪ねて色々なお話を伺い、文書や仏像などを拝見した。

調査

- ① 車を西巖殿寺に駐車するー鷺岡慶照ご住職（当時）から西巖殿寺所蔵の文書を見せていただいた。ご夫妻には言葉に尽くせない程お世話になった。
- ② 坊中を歩いて、元衆徒・元行者の坊および元山伏の末裔のお宅を訪問して大事に保存されている仏像および古文書を見せていただき、伝えられているお話を伺った。
- ③ 西巖殿寺から山上への岳道沿いにある六部墓の調査↓明治四（一八七二）年の廃寺後、衆徒方の坊舎から墓石を移転↓坊ごとに墓が整理されている。

- ④ 踊山神社から山上への道の途中にあるヤンボシ墓調査・文政七（一八二四）年に学頭坊弘解の命によって衆徒方山伏の墓が改葬され、山伏ごとに整理されている。
- ⑤ 天神山は国道57号線により分断されたが、残っている行者方の坊および行者方山伏の墓の調査。

- ⑥ 乙護法の調査で、佐賀市にお住まいの乙護法研究の大先達、鈴谷正男先生を訪ねてお話を伺ったー鈴谷先生は何度も西巖殿寺を訪問され、鷺岡ご住職と懇意であった。

- ⑦ 『国郡一統誌』・『肥後国誌』そのほか郡誌などに記載されている乙護法所在の地域をめぐり、旧阿蘇町・一の宮町・白水村・波野村・高森町・久木野村および佐賀県東背振村の教育委員会にお世話になった。
- ⑧ 熊本大学附属図書館寄託の「西巖殿寺文書」を川口恭子先生から紹介していただいた。

- ⑨ 熊本大学松本寿三郎先生の指導のもとに、国史研究室の大学院生たちが西巖殿寺所蔵の峰入り関係史料の翻刻を担当した。

その後、平成一六（二〇〇四）年に『阿蘇町史』が編纂され、第八編「山岳信仰と西巖殿寺」を担当し、永青文庫所蔵および熊本県立図書館所蔵の史料等を活用した。

多くの方々に支えられて二度にわたって阿蘇山信仰の調査が出来たことを改めて感謝している。



外国人観光客でにぎわう火口見学

参考文献

阿蘇惟之編『阿蘇神社』2007年、学生社

阿蘇品保夫著『一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書② 阿蘇社と大宮司』1999年、一の宮町

阿蘇町町史編さん委員会編『阿蘇町史 第一巻 通史編』2004年、阿蘇町

九州山岳霊場遺跡研究会・九州歴史資料館編『肥後の山岳霊場遺跡一池辺寺と阿蘇山を中心に一』九州山岳霊場遺跡研究会、2018年

佐藤征子著『一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書⑩ 神々と祭の姿』1998年、一の宮町

西英典著『地質屋が読み解く不動岩・景行天皇伝説と肥後熊本の神話』2024年、熊本出版文化会館

渡辺一徳著『一の宮町史 自然と文化 阿蘇選書⑦ 阿蘇火山の生い立ち』2001年、一の宮町

西巖殿寺ホームページ <http://www.saigandenji.com/>

監修 佐藤 征子(日本山岳修験学会)

発行 2025年3月
阿蘇カルデラツーリズム推進協議会
(事務局 阿蘇市経済部観光課)



古いにしへから続く祈りの場

火を噴く壮大な阿蘇火山は、古くから自然神としてあがめられてきました。阿蘇中岳の噴火口は周囲4キロと巨大で、激しく白い噴煙を上げる様子を間近で見ることができます。

(表紙写真提供：ジェットヘリサービス)